

Newsletter

東京大学大学院人文社会系研究科
多分野交流プロジェクト研究ニューズレター
<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/tabunya/>

**July 5
2000**

28

新年度のプロジェクトが発足

ワーキンググループ座長
岸本 美緒

前回のニュースレターでは、各主査の方々に今年度のプロジェクトの趣旨や計画を紹介していただきましたが、その計画に沿って通年の各プロジェクトが順調に発足しています。本号では、木村清孝教授主査の「生命観をめぐる諸問題」、逸身喜一郎教授主査の「古代ギリシャ・ローマ研究の方法」の二つのプロジェクトについて、活発な発表・討論の行わ

れている状況を報告していただきました。また、冬学期の「人間と価値：歴史意識」については、小島毅助教授主査からガイダンスの報告と提言をいただきました。院生の皆さんの積極的な参加を期待します。

毎年5月に、主査の皆様にお集まりいただいて、本演習に関わるさまざまな問題を話し合っていたく多分野交流演習ワーキンググループの会合を開いております。今年度も、多分野交流演習の直面している主な問題として、成果の公表・出版の問題、予算の確保と配分の問題、などを話し合いました。そのほか、ニュースレターのあり方に関して、年5回の原稿執筆はなかなかきついで、発行回数や構成の見直しを考えたかどうか、というご意見も出ました。ニュースレターは、研究科内のみならず、外部にも配布し、ご好評を得ているので、当面5回発行の方針を維持しますが、内容については今後、すべてのプロジェクトが毎号記事を書けるという形では必ずしもなく、柔軟化と記事の多様化をはかってゆきたいと思います。そのようなわけで、本号は「一回休み」のプロジェクトもありますが、ご了承ください。また、参加教官や学生の方々に、小エッセイをお願いすることもあるかもしれませんが、ご協力いただければ幸いです。

現在ロシアに出張中の沼野充義教授の編集による論文集『とどまる力と越え行く流れー文化の境界と流通ー』が発行されました。98年度・99年度の多分野交流演習の成果をまとめたもので、まさに多分野交流演習にふさわしい多様な内容の問題提起的な論文集とお見受けしました。詳しくは沼野教授から帰国後にご紹介があると思いますが、ご関心の方は、スラヴ文学研究室にお問い合わせください。

プロジェクト案内

生命観をめぐる 諸問題

主査 木村 清孝

木曜（隔週）5・6時限

諸氏の協力を得て、本演習は順調に進んでいる。参加学生数は、平均 15 名ほど。これまでに、主査による「序説—『死生観と生命倫理』の成果を踏まえて」（4 月 27 日）、農学生命科学研究科古田公人教授担当の「日本人と自然とのかかわりの変化」（5 月 11 日）、本研究科下田正弘助教授担当の「語り」と「時」と「涅槃」（5 月 25 日）、京都大学総合人間学部カール・ベッカー教授担当の「ターミナル・ケア」（6 月 8 日）、院生の藪内聡子氏（インド文学・インド哲学・仏教学専門分野博士課程所属）の発表「初期仏教における輪廻と業」を中心とする討論（6 月 22 日）の、計 5 回が終了した。次回は、9 月 28 日に、本研究科渡辺裕助教授による「芸術と生命」の提題が予定されている。

初回には、主査が本研究科関根清三教授編『死生観と生命倫理』の内容の概略を紹介して、それから何を学び、「生命観」を視座とするとときにどういう方向へ問題を発展させていくべきかについて提言を行った。要は、この演習では、人が複雑な重層構造の中で共生的に生きているということ、いわば生の現実態におけるいのちのあり方を、さまざまな角度から自由かつ率直に考えていきたい、ということである。

古田教授の提題では、スギと日本文化の関わり、現在多くが放置されるに至っている人工林の問題、人間と森林との関係の変化などが、諸資料を用いて詳細に論じられた。この時はとくに、国際的視野に立つ森林利用のあり方とそれに対するわれわれ日本人の責任に関して深く考えさせられた。

下田助教授は、古代インドおよび初期仏教における「時間」の捉え方を概観した上で、「私」というものを作り出し、それに執われつつけるわれわれの現実を明らかにされた。そして最後に、ブッダの教えはその「私」からの絶対的解放を目指すものではないか、と

主張された。発表後の議論はさまざまな問題に及んだが、もっとも印象的だったのは、「諸行無常」と古くから訳されてきた言葉を、その原文に遡り、発表の論旨に即して「作りつづけたものは何にも属さない」と解釈・翻訳され、質問に応えて再確認されたことである。

ベッカー教授は、ビデオとOHPを使いながら、まず西洋における生命倫理思想の歴史と枠組みについて述べられた。次いで、インフォームド・コンセント（IC）の考え方がどのような経緯で成立し、発展してきたのか、そのジレンマは何か、などに関する重要な諸見解を紹介され、さらに、国際的に比較して、日本では終末期の告知がいわゆる先進諸国の中でずば抜けて少ないこと、病院死が全体の70%近くもあることなど、「日本的」といえる独特の終末期医療の問題点を明らかにされた。とくに、教授が挑発的に提起された、「死にたい」という衰弱した老人や重症の患者にはどう対するべきか、という問題をめぐっては、そもそも「死にたい」とは何のためか、

何を意味するのか、といったところにまで議論が及び、活発な論戦が繰り広げられた。

藪内氏の発表は、下田助教授の提題を補足し、それに連続する側面をもつもので、輪廻と業、および、その世界を超えていく実践は何かについて、ウパニシャッド文献と初期仏典の関連する諸教説を紹介しながら、因果を信ずることや五戒を守ることの重要性を指摘された。また、これを承けてベッカー教授が、現代文明社会の行き詰まり状況を打破していくための提言を行い、輪廻の思想や「不殺生」の戒めに学んで「直線的な世界観から循環的な世界観へ」転換することなど、仏教、とくに日本の仏教から学び取ることが不可欠ではないか、と論じられた。

このように、本演習は、現在までのところ極めて有意義に進行している。途中で息切れすることなく円成することを、主査として切に念ずるものである。

（主査・木村清孝記）

プロジェクト案内

古代ギリシャ・ ローマ研究の方法

主査 逸身喜一郎

金曜 5・6 時限

顔合わせと今後の進行の打ち合わせをした第0回(4月14日)に続いて、すでに第1回(4月28日)と第2回(5月26日)が終わった。このニュースレターが発刊される時点では、第3回(6月23日)もまた、すでに済んでしまっているはずである。

あちらこちらで記したことをまた繰り返すが、このプロジェクトの当面のねらいは、同じテキストから出発してなおも生じる、哲・史・文の違いをとことん再認識することにある。西洋古典学会における哲・史・文の分離は、否定しようもなく存する。しかしその統合は(それが解消されるすがどこかにあるはずだ、とひとまず安易に思いこんでもなお)、互いの方法の相違を知らずして起こるべくもない。けだし方法は学問の歴史の所産である。シンポジウムの重要性とおもしろさを毫も否定する気はないが、シンポジウムで簡単に越えられるような隔壁ではない。

よって今年度の教官側の課題は、他分野を意識したうえで、自分のディシプリンが見えてくるようなペーパーを読むこと、あるいは問題提起をすること、ならびに(どうしても学生諸君は臆することが多いので)積極的に他分野の教官に対し質問の口火をきること、そのふたつにおいた。いっぽう学生の課題は、ともかく積極的に議論に参加すること、そのためには質問のテクニックを実践しつつ学ぶことである。発表の論旨そのものを追うことの重要性はいうまでもないが、それとともに、発表者の立論の適切さと、時には狡猾さをも考察の対象に含め、疑問視することも求められる。

それがはたしてうまくいっているか。

第1回の発表が主査(逸身)であったため、手前味噌になるけれども、すべりだしとしてはまずまずといえよう。分野をこえて質問は活発であった。学生諸君の参加者も予想以上に多く(東京大学人文社会研究科でギリシャ

語・ラテン語を「読む」ひとが、これほど多いのかと、あらためて感心した)、多分野交流演習室に常時、補助席を持ち込んでいる。

さらにまた毎回参加をお願いしている連携教官の方々の貢献は大きい。専任教官よりも若い世代に属する連携教官が、しろうとを装って他分野の年上の専任教官に質問をふっかけてくださればこそ、学生もまた励まされる。議論が滞りなくすすむのは、そのおかげといってよい。さらにまた他分野の眼、ないしは理解を意識しつつ行われる、同一分野内の教官どうしの議論の応酬も、多分野交流ならではのことであろう。

第1回と第2回の発表のテーマ、ないしは議論の中心となった話題を、逸身の判断で要約しておく。

第1回 (4月28日)

逸身喜一郎 『アルカイク期のエレゲイアと、作者の個性』

従来、個性豊かな詩人たちとしてとらえられがちなアルカイク期の詩人の作品のことは、はたして個性の発露とみなしてよいの

る作品の場合、シュンボシオンという場で発表されたということ、すなわちシュンボシオンの参加者の期待にそって、それらの作品ができあがっているということをおさえるべきである。

この論を極端にすすめれば、例えばアルキロコスという名前も「符丁」になってしまう。かなりの人々がそこに抵抗した。

第2回 (5月26日)

天野正幸 『テキストを「理解する」とはどういうことか』

プラトンやアリストテレスの術語を翻訳語に置き換えて理解することには誤解の危険性がある。このことを具体的に事例に即して論じたが、その例のうち、とりわけ論議を呼んだのは、ギリシャ語の ウーシア であり エピステーメー である。例えば後者を「知識(knowledge)」と理解するのは正しくない、という天野氏にたいし質問が呈され、質疑応答から、著者(たとえばプラトーン)が何を意図していたか、ということは別の問題であることが見えてきた。

か。むしろエレゲイアというジャンルに属す

プロジェクト案内

人間と価値： 歴史意識

主査 小島 毅

冬 水曜 5・6 時限

今年度のガイダンスを5月17日（水）に多分野演習室で開催した。「今年は学生自身の研究報告を主体にして運営する」という前宣伝がききすぎたのか、当日集まった大学院生はわずか5名。これに、参加教官5名のほか、東大出版会からの2名にも加わってもらって、プロジェクトの成果公表について、将来的な展望を話し合った。

今年度の演習の趣旨は27号で紹介済みなので、ここでは繰り返しを避け、以下、主査として今年度の運営にこめた狙いを述べてみたい。これは小島の個人的な述懐であって、参加教官の総意ではないことをあらかじめお断りしておく。

* * * *

本プロジェクトは多分野交流演習として開講3年目になるが、それ以前から東アジアコースのコース共通演習として数年間の実績を持っている。小島が参加するようになったのは、東大に配置替えとなった1996年度からであり、自由討論における活発な応酬は常に刺激的であった。ただし、演習の題材は参加教官の既発表論著あるいは書き下ろし原稿であり、それらに対する学生のコメントは（個人差はあるが）控えめで遠慮がちであるように見受けられた。したがって、教官および一部の積極的な学生による討論を、その他の学生に見せるという要素が強く、それはそれで教育的効果はあるであろうが、やはり「演習」という授業形態からすると、不本意な部分があった。

また、参加学生の多くは単位修得を目的としていないため、自分に興味のある回にだけ顔を見せる者も多かった。これも一概に悪いことではないのだろうが、自分の専門に近い内容の時だけ参加するのでは、各専門分野で開講している普通の授業と変わらず、「多分野交流演習」の趣旨にそぐわない。

こうした傾向は、昨今の大学院生の研究活

動への姿勢に由来するのであろう。そして、そう仕向けているのは教官側かもしれない。就職のために公表論文の本数を要求され、また、早期に博士論文の執筆をうながされる中で、自分が論文の題材とする範囲とは直接かわらない内容の論文を読み、それをめぐる討論に参加することは、要領のよい学生にとっては、無駄な作業と思われるのかもしれない。

もしそうだとしたら、そうした誤解を与える指導を教官側がしてきたことを反省しなければならない。学界全体に研究成果が蓄積されれば蓄積されるほど、個別の研究は細分化していくことは避けがたい。しかし、なお、そうした不可避の趨勢にあらがって、多分野＝他分野への関心を持ち、そこで問題になっている事柄を自分の研究活動にも反映させていく開かれた姿勢を学生に持たせないと、

「要領よくまとまってはいるが、読者に感銘を与えない博士論文」が量産されるだけになってしまうだろう。

他の専門分野の院生が、いったいどんな問題関心からどのような研究をしようとしているのか、そして、それは（専門は異なるが）自分の問題関心とどう切り結ぶのか。そうした情報交換・真剣勝負の場として、今年度の演習が機能してくれればと願っている。

* * * * *

本プロジェクトは冬学期開講のため、毎年、この時期の号には書く内容がなくて困ってきた。今回は主査の独断で貴重な頁を浪費したことをお詫びします。

演習本番は、10月11日、東アジア思想文化博士課程3年水口拓寿氏の報告で幕をあげる。例年にも増して、熱い議論が闘わされることを期待する。

「多分野交流ニューズレター」
第 28 号
平成 12 年 7 月 5 日発行
東京大学大学院人文社会系研究科
多分野交流プロジェクト研究
ワーキンググループ事務局発行
責任者 岸本 美緒
TEL: 03-5841-3898

連絡先 情報メディア室
TEL: 03-5841-3880
FAX: 03-5841-8949

Edited by
Kaori Domae
Noboru Koshizuka